



花五十三駅

宮一  
社  
田

1301  
4





麻ねのあは中う吹味をる身たが役目ちうらうその  
日辨のたうらう先う衣邪てをる小うらわ椒着へ  
つと約給養しそ身えと流を乳しそらまるとに  
とらん作機多りの只あしくと流をうらう高段人  
あしくイヤ中 おゆねの心をあうらうゆをれと何とや  
小供のちを乳の腹にねたよゆめんどあうらうておゆ  
下されませと流までゆを彼さうらう作機多り  
立て椒着のうらうあうらう後ふ又流へく分時欠の  
化正治の功ふより心をもへめくして古く飾るゆや

綿あづまらうらのたをうらう葉名の油より糖あふ  
子龍女は仇を毒殺とも正治せよの物命の馬矢  
の屋は長門の面目の空加ごとく清く物に流の  
海海より是を乗あうもたうらうゆを糖のたにうら  
ゆりおらうは是元よいとたを中うらう糖のまを吹さ  
目と止めくあ中と足まはるのわら白きまはく廣  
らそんの文字にうも似うらう時欠横よとそことうら  
んの文字も喜んあん扱をせよのあんさうらう  
あはじと足るゆは白き酒をうらう流いて影のまは

播へ実よ皆しより入るくさのみどりの月小獨獨冊  
おのづうらあるおまの種のはるはあらん財は遠小  
の畑への智のゆりうぞ耳をそむごとくく安ん  
海の色中を誰う無草の浮名からるの都るまの  
あふひの草はあひの浦海とらむせぬき床のうみ  
まきまをくとまき操とうふ一う智をそむけり  
かま入樓門のまれと開けくまのいれあて中う  
女なり根を絶女うてや抑ひそんと漢づく入よまへ  
をそまいうふあひとや抑ひかうらんまのうり財欠

くよ抑ひやう根をけ安ん化の指は治まじし  
何とうまとあしりせしぐまが言実がえまかま  
新玉小仇とあそ毒絶と治まきよう一幸よかつけ  
財欠と是へ抑ひとまをそむとありる敷  
あ難や嫉しやとそむくよまてまの傍りく  
そんば遠へあそ強やこが映も今とありしは  
浦海の子が細物よ出まきまに勢舞うり  
嫉しまよたがひりよよみんを  
お入中り酒のまのたけううまよまゆわの秋のま





駿河の素名屋待の姫  
お給文り玉る候

世田八目











と、いふと押りのつておがたまひ百両ハテとよきと終り  
なアと名案ふあさうの一石の門を百両ハお袋中を  
深と紙と押開きささる成沢集人一色の今と紙出  
て二人がおふ若屋つ子と一石と砂らんは中と砂  
あがら振志が寸志とつあよき急も成合をかわねぐの  
旧情千子も難い集人紙何のれうい及びませぬ。アイヤ  
そまいそよと只今おあが石とあさる不居て降れて  
若石様姫と換してんサアおふおの紙へ。そんなら  
これハ紙紙と陸ふすめでかさんよも子もさういふ紙

お袋一ヤケに安徳と地させ中一ヤアイけお合と入  
かろうんおさんの事と何んどそよおおも紙で  
と、いふ。姉さん又あつてもおざりませうとあひに  
名紙と勝まつ。おまて。妻へ入る急伊勢参りも  
彼合紙帳中返して集人よ向ひ是と中も何あつ紙の  
おあさひあさうござりません。モラおいとねやませんと  
んととら紙押とめ。マアくませよと。おとら  
紙用でと。オ、用があらうマアまら中紙の  
見せると。さうでござりました。う、紙と急の足袋紙の





五十四十三





凡ゆるりぞ後河くみ時久もいふ所んと立ぬまの事  
 人も四かへをい出地をいひあつたすはる匹支が事  
 と控されば以ぬいまはしとつり門の事子信風静まらぬ  
 も初とせしうぶ後河くみもたさうし收びぬぬの終  
 威意あつたけ城の以難をそくりせあふり同前原軍  
 人千早みあぐやるアと舟くよろそひ勇まらつが  
 めとこと七経一なる

吾嬬下五十三駅卷之四終

吾四十六



真馬

天守城



